

『古代アメリカ』19, 2016, pp.105-118

<調査研究速報>

グアテマラ、ティカル遺跡における 2015 年度の発掘調査

中村誠一

(金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター)

1. はじめに

紀元前 400 年頃にグアテマラの熱帯雨林地帯に成立し 16 世紀にスペイン人たちによってその政治経済体制を解体されるまでの約二千年の間、現在のメキシコ南部からグアテマラ、ベリーズ、そしてホンジュラスとエルサルバドルの西部にかけての地域に盛衰したのがマヤ文明である。マヤ文明の政治文化史の中では、地域全体が決して一つの政治勢力(王朝)に統一されることがなく、「古典期(紀元後 250~900 年頃)」と呼ばれる文明の最盛期には、多いときで 60~70 くらいの王国が各地で栄えていたといわれている。その中でも、現在グアテマラ共和国北部のペテン県に位置するティカルは、最大かつ最重要な、人口の密集した都市をもつ王国の一つであった(図 1)。ティカルは、1979 年にユネスコによって第 1 号の複合遺産として世界遺産登録され、ジャングルの中に廃墟となったピラミッド神殿^(註1)が残る古代都市遺跡というイメージで広く一般に知られている(写真 1)。

このようなマヤ文明の代名詞ともいえるティカルで行う諸活動の一つとして、金沢大学は、古代都市の中核部にある「北のアクロポリス」という区域(図 2)で考古学調査を行っている[中村 2013, 2015; Nakamura et al. 2015]。本稿では、以下、

2015 年度に北のアクロポリスで実施した発掘調査の概要を紹介するが、グアテマラのティカルという古代都市がマヤ文明研究においてどのような位置づけにあり、北のアクロポリスで学術調査を継続的に展開していくことで何を明らかにしようとしているのか、という点についても説明していく。

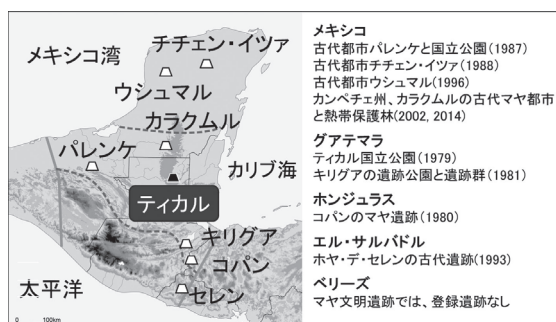


図1 マヤ文明の世界遺産登録遺跡とティカル
(地図: NASA SRTM データを Kashmir 3D で作図)



写真1 1号神殿から見た2~4号神殿

2. ティカルにおける調査研究史

ティカルの発見に関しては、17 世紀の末にスペイン人たちに最後の抵抗をしていたタヤサルのイツァ・マヤ人たちを改宗させようとして失敗したアベンダーニョ神父らが、ペテン・イツァ湖北のジャングルの中で道に迷って偶然発見した遺跡がティカルではないか、という説がある〔石田 1967:13〕。しかしながら、定説では、ティカルの発見は、1848 年モデスト・メンデス Modesto Mendez とアムプロシオ・トゥツ Ambrosio Tut によってなされたとされる〔Coe 1967:12; Harrison 1999:31〕。その後、その巨大な建造物のために、ティカルは常に探検家たちの注目を集めた。1877 年に神殿 1 や 4 の木製リントル（まぐさ）をスイスのバーゼル博物館資料として収集したグスタフ・ベルノウリ Gustav Bernoulli をへて、1881 年から大英博物館のアルフレッド・モーズレイ Alfred Maudslay がティカルを訪問し中心部の平面図作成と写真撮影を行った。モーズレイはティカルを代表する神殿ピラミッド群を露出させるために、周りのジャングルの樹木をことごとく切り払ってしまい、現在の基準ではたいへん悪名高い。しかし皮肉にも、露出されたピラミッド写真によりジャングルに覆われたティカル中心部の巨大さが当時の人々に実感されることになった〔Harrison 1999:31-32; Maudslay 1889-1902〕。

モーズレイに続いてティカルを訪れたのは、ハーバード大学ピーボディ博物館に雇われたテオベルト・マーラー Teobert Maler である。マーラーは 1895 年と 1904 年にティカルを訪問し、5 つの神殿ピラミッドを含む中心部の平面図作成を行った。調査期間中に彼が住居とした中央アクロポリスの建造物 5D-65 は、今日、別名「マーラーの神殿」とも呼ばれ、中央入口の東側脇柱に彼の名前と滞在年が彫られていることから観光名所となっている。マーラーは、自身が作成した地図や調査報告書を出資元であるピーボディ博物館に提出するのを拒んだため、ピーボディ側は新たな探検隊をティカルへ送り込まざるを得ず、アルフレッド・トザー Alfred Tozzer とレイモンド・マーウィン Raymond Merwin が 1910 年に地図を完成させるためにティカルへ送り込まれたといわれている〔Harrison 1999:34〕。

20 世紀前半はカーネギー研究所がマヤ文明研究を推進し、カーネギーに所属するマヤ研究者が活躍した時代である。1914 年から 28 年までシルベナス・モーレイ Sylvanus Morley がマヤ文字の記録のためにたびたびティカルを訪れた。また、ティカルの北方約 18km にあり、マヤ低地最初の大規模な考古学的発掘調査地となったワシャクトゥン遺跡の調査隊に属していたエドウィン・シュック Edwin Shook も 1934 年、1937 年とティカルを訪問している〔Harrison 1999:34-35; Shook 1998:119〕。

これに続くのが、1956 年から 69 年までティカルで大規模な考古学調査を繰り返したペンシルバニア・ティカル・プロジェクト（以下、PTP と記載する）である。熱帯のジャングルを切り拓き造られた滑走路を使って、空路必要な物資や資機材・人員を運び込んだり、古代都市の貯水池周辺にキャンプサイトを作って自給体制を整えたりというジャングル考古学的手法に加え、低地マヤ遺跡の地図製作法の基準統一、学際的なアプローチ、



図2 ティカル遺跡中心部と北のアクロポリス
(4km²の範囲 : Carr and Hazard 1961 を改変)

暫定王朝史の復元、発掘と修復を同時並行的に行い観光開発とも結びつける手法など、PTP は善きにせよ悪しきにせよ、後の時代に続く数多くのマヤ考古学プロジェクトの慣例を作り上げたマヤ地域における空前絶後のプロジェクトである。

初代のPTPディレクターであったシュックによれば、当初ペンシルバニア大学博物館は、1940年からティカルの発掘を開始しようとしていたが、第二次世界大戦の勃発、アメリカの参戦でそれどころではなくなり、戦後もグアテマラ側の政情によりしばらく開始を見送らざるをえなかったということである[Shook 1998:119-120]。いまだにこのプロジェクトの功罪に関しては、グアテマラでは議論が尽きないが^(註2)、当時は「世界遺産」という概念もない時代であり、マヤ考古学における「発掘の時代」の真ただ中である。マヤ文明のような石造建造物を主体とする古代文明遺跡の修復の仕方に対して、国際的な指針となったベニス憲章が制定されたのも1964年以降であったことを考えると、ティカルが国際観光地としての現在の姿になったのも、1979年に世界複合遺産第1号としてユネスコ世界遺産リストに登録されたのも、PTPの功績によるところが大きいと言わざるを得ない。ティカルがマヤ文明に関する概説やマヤ文明史を執筆しようとする際の核になるのは、このプロジェクトからである。1960年代から70年代には、学術雑誌に掲載されたマヤ文明に関係した論文は、その多くがティカルに関する何らかのテーマを取り扱っている。

PTP終了後は、グアテマラ人主導のティカル国立プロジェクト Proyecto Nacional Tikal : PRONAT が開始され、1972年から1980年まで当時ティカル国立公園管理事務所を任されていたルーディ・ラリオス Rudy Larios とミゲル・オレーゴ Miguel Orrego がグループ 5E-11 の発掘調査・修復をグアテマラ政府の資金で行っている[IDAEH 1983]。また、1979年から84年まではムンド・ペルディード地区においてフアン・ペドロ・ラポルテ Juan Pedro Laporte をディレクターとする発掘調査・修復が行われた。さらに1984年から85年までティカル「北のグループ」による発掘がホルヘ・マリオ・デ・レオン Jorge Mario de Leon をディレクターとして行われ、「ティカルの男」と呼ばれる石造彫刻が3D-43建造物下部から見つかった。PTP終了後の1972年から2000年までのティカルでのプロジェクトに関してはラポルテがまとめている[Laporte 2001]。

ティカル国立プロジェクトと時期的に重なる1992年からは、スペイン開発庁が20年にわたりティカルでの発掘調査、修復保存を実施した。ガスパール・ムニョス Gaspar Muñoz、オスカル・キンターナ Oscar Quintana、フアン・アントニオ・バルデス Juan Antonio Valdés らが実施した1号神殿の修復[Muñoz and Quintana 1996]や石碑40の発見[Valdés et al. 1997]に続き、グアテマラ人考古学者のオスワルド・ゴメス Oswaldo Gómez と修復専門家のラファエル・チャン Rafael Chang を中心とした調査団は、5号神殿、7つの神殿複合というティカル中心部の2つの重要区域の修復を中心とした調査を実施し、協定によりスペイン開発庁がその資金の一部を負担した[AECI 2013]。

このように、その発見以来、ティカルは常にマヤ文明研究の中心で継続的に発掘調査や修復が行われてきた最重要遺跡の一つである。2012年にグアテマラ政府と正式なプロジェクト協定を結んだ「金沢大学のティカル北のアクロポリスプロジェクト Proyecto Acrópolis Norte de Tikal」は、こうした発見以来170年近くにわたる考古学的学術調査史の延長線上に位置しており、現在ティカルで組織的に活動している唯一の学術調査団である。

3. マヤ文明研究の潮流と北のアクロポリス発掘調査の意義・学術目的

マヤ文明の研究は、従来の学問分野としては、考古学を中心としつつも、エスノヒストリー、文化人類学、言語学、碑文解読学などを組み合わせた学際的なアプローチによって行われている(図3)。特にアメリカ大陸

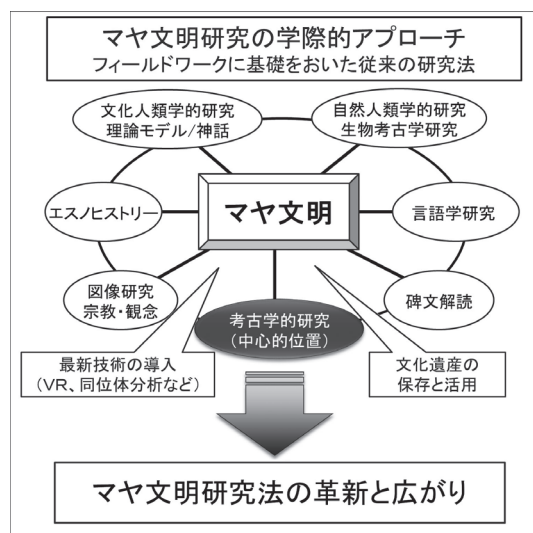


図3 マヤ文明研究の学際的性格

他の古代文明と異なる点は、完成された文字体系を有した唯一の古代文明であったために、その文字によって刻まれた碑文の解読が進展することにより、歴史的なアプローチが可能となった点である。歴史学の主要な方法論は「史料批判」であるが、筆者の個人的な見解では、この方法論がマヤ文明研究に十分適用されずに、碑文解読の結果やそれから導き出された「仮説」がまるで歴史であるかのように独り歩きしている状況が多いように見受けられる〔中村1999:33-35, 168〕。

このような潮流や問題意識を踏まえた上で古典期マヤ文明最大の古代都市といっても過言ではないティカルの都市中核にある北のアクロポリスを調査する意義と目的の主要なものは以下の2点である〔中村2010:56-59〕。

3-1. 初期マヤ文明の形成過程におけるティカルの役割の再検討

現在では、文明社会成立の指標とされる考古学的に確認できないいわゆる「古典期低地マヤ文明」の文化要素が、ほとんどすべて先古典期の時代から存在したことが明白となっており、紀元前の時代にメキシコとグアテマラの国境付近の地域にエル・ミラドルを中心とする初期マヤ文明の社会が成立していたと考えられる〔中村2007; Sharer and Traxler 2005〕。「初期マヤ文明の社会」とは、マヤ編年で先古典期後期（紀元前400年頃～紀元後100年頃）と呼ばれる時代の社会であり、そのほとんどが紀元前の時代にあたる。初期マヤ文明には、それよりも800年程度後の時代に最盛期となる「古典期低地マヤ文明」の社会と異なり、王朝と呼べる血縁に基づく支配者の明確な系譜が存在したかどうか、いまだ不明である。王の誕生や即位、他都市への戦勝、王の執り行った儀礼といった、社会の支配者である王の事績や王朝の歴史を、マヤ長期暦とともに石碑のような記念碑に刻んだ事例もいまだ確認されていない。この先古典期後期に栄えた古代都市遺跡としては、エル・ミラドルのほか、コナクベ、ティンタル、サン・パルトロ、シバル、ホルムル等が挙げられているが〔Sharer and Traxler 2005〕、メキシコ領に存在するカラクムルもこの時代にはかなりの規模をもつ都市であった可能性がある〔Carrasco and Cordeiro 2014; Delvendahl 2008:28-31〕。

こうした中、先古典期後期におけるティカルの都市規模や政治権力の形成具合はどうであったのか、先行研究ではこの点が不明確なまま残っている。ティカルはエル・ミラドルを中心とする紀元前の初期マヤ文明の形成過程からは孤立した存在で、古典期になって初めて頭角を現してきた存在だったのかどうか、という点である。この点を、PTPの先行研究からティカルにおける先古典期後期の居住や建築、埋葬が確認されている都市中核部、北のアクロポリスの発掘調査で追及する。

3-2. 碑文の解読から復元されているマヤ文明王朝史の定説の再検討

碑文の解読結果をどう取り扱うかという点で、数多くのマヤ考古学者はほぼ無批判に碑文解読家が提示する

結論を受け入れている。一部の研究者はこういった状態に警鐘を鳴らし始めているが〔塚本 2016:75-76〕、今のところ、後述する定説であるティカルとカラクムルの二大超大国抗争説に関しては、そのまま受け入れざるを得ない状況である。しかし金沢大学のプロジェクトでは、この点に縛られることなく前提から疑って再確認しようとしている。そのために、古典期マヤ文明史の定説の中核を構成する資料を PTP で提供した北のアクロポリスは、またとないフィールドなのである。以下、2つのトピックスに触れる。

3-2. 1) 378 年事件の再検討

本稿では、ほとんどすべてのマヤ研究者に受け入れられている以下の仮説の中核を「378 年事件」と呼ぶ。この仮説によれば、テオティワカンと関係するシヤフ・カック（と彼に率いられた集団）は、西暦 378 年マヤ低地に侵入する。エル・ペルー/ワカを経由したのちティカルに「到着」し、テオティワカン支配者の息子をティカル支配者に据えるがこれがヤシュ・ヌーン・アイーンである。その後、シヤフ・カック（と彼に率いられた集団）は、ワシヤクトゥンにも「到着」する。これが後の時代に、西暦 378 年の日付とともに石碑 5 に彫られ、さらに現在ではすでに破壊されてしまった壁画の場面の題材となる。西暦 4 世紀の終わりから 5 世紀の初めにかけてマヤ南部低地に色濃く見られるテオティワカンの文化要素はこのようにして低地マヤ社会へ導入され、テオティワカンがティカルをはじめとするマヤ低地社会の政治に介入、あるいは政治的な影響を与えたとされている〔マーチン、グルーベ 2003:38-50; Martin and Grube 2008:29-36; Stuart 2000〕。

この仮説に関しては、これまでほとんど碑文だけの証拠から論じられてきた。碑文解読は通常の考古学的手法ではとうてい明らかにできない細部の歴史をきわめてわかりやすい形で目の前に示して見せるため、その効果は絶大である。しかし、そこから復元された碑文解読家たちのシナリオが、最新の理化学的分析と合致しない事例が相次ぐことにより混乱をきたしている。

例えば、北のアクロポリスの神殿 5D-34 の中から見つかり、ヤシュ・ヌーン・アイーンの墓と同定された埋葬 10 の被葬者は、ストロンチウム同位体の比率が、テオティワカン出身というような外来人の比率ではなく、おそらくティカル出身者であることを明らかにした〔Wright 2012:345-346〕。PTP が発掘した古典期前期の他の出土人骨も一体を除いてはマヤ地域出身者であると考えられ〔Wright 2012:349〕、テオティワカンの政治的介入があったという碑文の解読のみに基づいた仮説自体が揺らいでいるといわざるをえない。ティカル北のアクロポリスにおける再調査は、あわよくば、この問題に新たな視点、展望を与える資料の獲得を視野にいれている。

3-2. 2) ティカルとカラクムルの抗争に関する再検討

これまでも指摘してきたが〔中村 1999:156; 2003:51; 2007:246〕、冷戦時代の米ソ対立とそれによって動く世界の政治情勢という構図を古代マヤ研究に持ち込んだような碑文解読家のマヤ政治史復元に、筆者はいまだ違和感を拭い去ることができない。古代マヤの戦士は鉄や金属の武器も持たず、荷車や移動用家畜も持たなかった。このため、騎馬軍団というような強力な戦闘組織もできなかったと思われる。こういった状況下で、たいへん距離の離れた古代マヤ王国間における戦争とその結果としての政治的な支配・強制・服従は、どのような形で行われていたのだろうか。この点を誰も明快に説明していない。さらに、そういった重要な抗争の勝利について記録した記念碑が、同時代にはなくかなり後になってから作られるという不思議な現象をどのように考えるのか、だれも明快に説明していない〔中村 2007:35-36, 248-249〕。

もちろん、学界の定説として世界のマヤ文明研究者のほとんどすべてが認めている復元であることには留意すべきであるし、責任上、一般の人々を対象とするような講義や講演では筆者も定説に沿って話していく。し

かし、自身の学術調査ではこの定説に縛られることなくティカルとカラクムルの関係を再検討してみたいと思っている。なぜならば、ティカル側の資料にカラクムルとの敵対関係を直接示す考古・碑文資料は、それほど多くないからである。

ティカルではカラクムルとの抗争を直接示す資料は7世紀末から現れる。695年に比定される神殿1のリンテル3、734年に比定される中央アクロポリスから出土した縛られたカラクムルの高位の人物図像がある。後者には縄で縛られた捕虜と思われる人物とカラクムルの紋章文字を伴う名前が彫られているため、695年に即位したハサウ・チャン・カウィールが734年のカラクムルとの抗争に勝利した記念碑だとされる。

それ以前はどうだったかという、7世紀前半にティカルの紋章文字がドス・ピラスの紋章文字としても使われるため、ティカル王朝の分裂があったとされる [Martin and Grube 2008:56-57]。ティカル王家と同じ紋章文字を掲げ、あたかも自分が正当なティカル王家の継承者であると主張しているかのようなバラフ・チャン・カウィール王によるドス・ピラス王国の設立とカラクムルとの同盟により、ティカルは677年に敗北を喫しているという [Martin and Grube 2008:56-57]。さらにさかのぼって、562年にカラコルと同盟したカラクムルがティカルを破ったといわれているが、その碑文はカラコルにあるものである。通常であれば、碑文のあるカラコルの支配者がその主人公だと思われるが、カラクムル対ティカルという超大国二つの対立図式で構築された古典期マヤ文明史の中では、常識的なかつての解釈を変更し、カラクムルの支配者が主語に置き換わっている [マーチン、グルーベ 2003:130; Martin and Grube 2008:90]。

どちらの解釈が妥当であっても、推定上、敗者のティカルの立場は変わらないわけなので、6世紀後半～7世紀のティカルは、まわりにティカル包囲網をめぐるされた挙句、散々カラクムルに痛めつけられ衰退を余儀なくされていたということになる。約130年にも及ぶティカルの「暗黒時代」 [マーチン、グルーベ 2003:55-56; Martin and Grube 2008:39-40] という仮説である。そこでこの「暗黒時代」仮説が正しいのかどうかを、北のアクロポリスの南西端にある未発掘・未調査の建造物 5D-35 およびその周辺の発掘調査で検証する。もちろん発掘してみないと確かなことは言えないが、この建造物は、もともとあった北のアクロポリスに後の時代に接合されたような形態をしており、その建設・使用時期をティカルの暗黒時代とされる6-7世紀と考えてもおかしくない。とすれば、その発掘調査は、ティカルとカラクムルの抗争を含む当時の政治状況に関する一定の展望を与えるのではないかと考えられる。

ティカルでの建造物の発掘調査許可取得は、事前に修復保存資金を確保していることが前提条件となる。この点において、2016年度中にユネスコ日本信託基金を北のアクロポリスの3つの建造物 (5D-22, 5D-33nd, 5D-35) の修復保存へ導入することが決まり、いよいよ建造物 5D-35 の事前発掘調査を行う条件が整った。

4. 北のアクロポリスの2015年度発掘調査

1956年から69年まで北のアクロポリスで行われたPTPの発掘調査は、1号神殿が載っている大広場のプラットフォームを含む北のアクロポリスの建築群を支える3層の巨大なプラットフォームに焦点をあてたものであった。コウ自身が述べているように、母岩 (地山) に到達したと考えられているいくつかの個所を除いて、彼らの発掘のほとんどはこの神殿建築群を建設するための水平面を作り出すために敷かれた盛り土・詰め土を対象に行われたといつてよい。発掘で露出・確認された盛り土・詰め土の水平面の重なり具合やその建築軸の変更から北のアクロポリスの発展プロセスを復元したのである [Coe 1990; Loten 2001]。

そこで我々の発掘調査では、PTPで発掘されていない北のアクロポリス北東部を調査対象地として選定した

(図4)。2015年度の発掘調査は、全く未調査の区域でPTPが報告している編年や北のアクロポリスの発展過程について再確認するとともに、良好な基礎的考古資料を獲得することを現場の目的として掲げた。前章で上述したマヤ文明史の定説に関する2点の問題意識を念頭においているものの、それらを追及するための発掘調査はかなり大規模なものとなり、修復保存費用を含むしっかりした予算的裏付けと調査・修復・保存の各段階における詳細計画のグアテマラ政府との合意、観光者対応等のマネジメント計画の合意等が事前に必要である。そのため、2015年度の発掘調査に関しては、2016年度以降の集中的な学術調査の前段階と位置付けた。図面、写真つきの詳細な発掘報告書^(註3)は、考古学調査規程により、グアテマラ文化自然遺産局グアテマラ人類学歴史学研究所、先スペイン期・植民地期モニュメント部に提出済みである[Nakamura and Urizar n.d.]。

ペンシルバニア大学博物館が出版しているティカル中心部の平面図[Carr and Hazard 1961]では、北のアクロポリス北東部に見られる3層のプラットフォームのうち、一段目(最下層)のプラットフォームは大広場で1号神殿が載っているプラットフォームにつながっている。また二段目のプラットフォームは、北のテラスと呼ばれる北のアクロポリス南(大広場側)にひろがるテラス部につながっている(図4参照)。2015年度の調査においては、プラットフォーム二段目に発掘溝300-Aを、最下層の一段目に発掘溝300-Bを設定して調査を開始した。最初の発掘面積はいずれも2m×2mのピット形とし必要に応じて拡張することにした^(註4)(図4)。

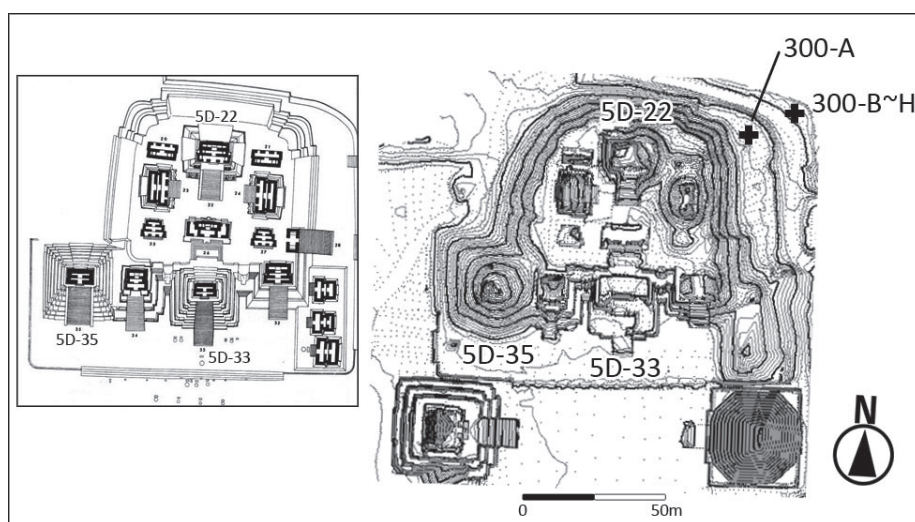


図4 北のアクロポリス(左: ペンシルバニア大学プロジェクトの作成地図[Carr and Hazard 1961]、右: 金沢大学プロジェクトの作成地図)

4-1. 発掘溝300-A

最初の発掘溝は、二段目のプラットフォーム上に設置され深く掘り下げる形で発掘が行われた。PTPの報告書[Coe 1990]によれば、このプラットフォームの祖型が建設されるのは、早ければ北のアクロポリスのタイムスパン12の時期とみられ紀元前1世紀頃に比定される。現在と似た形になったのは、タイムスパン8の時期とみられ紀元後190~325年頃である[Loten 2001:235-244]。我々の発掘では、そのほとんどが石灰や、小石と石灰を交互に版築しながら敷いていく4.5m以上の厚さ(高さ)をもつ盛り土層が確認された(写真2)。二段目のプラットフォームの原型と思われる。出土土器は、その大多数がカウアック期(紀元後1~150年頃)に属す



写真2 発掘溝 300-A に出現した詰め土補強壁。壁面には、版築状盛り土を示す層位が見えることに注意（左）石灰と小石を版築状にした盛り土層の細部（右）

設定された発掘面積（2m×2m）を守ったまま深く掘り下げられたので、詰め土をその中に入れて固める枠型補強壁の一部が出土したり（写真2左）、サブ・プラットフォームと関係する破壊された建造物の一部か、何らかの遺構が深い地点で出土したりしたため、掘り下げが困難となり地表下7.7mの地点で中断せざるを得なかった（写真2左）。しかしながら、依然としてカウアック期の土器が出土しており、その一部はチュエン期（紀元前350～紀元後1年）のものであるかもしれない。こうしたことから、地表面から10m以上といったより深い掘り下げ発掘が必要であり、より広範な初期発掘面積を確保することが必要とされることがわかった。

4-2. 発掘溝 300-B-H

一段目のプラットフォームに設定された発掘溝 300-B においては、発掘溝の地表面から40センチ下のところに保存状態の良い漆喰の床面が確認された。北側部分の一部を残して南側半分を切り下げはじめた時に漆喰の床面上に線が刻まれていることに気づき^{〔註5〕}、300-C 以下、発掘区域を拡張し漆喰の床面を精査したところ保存状態の良好な「パトリ」が発見された^{〔註6〕}（図5、中村2015: 写真7）。

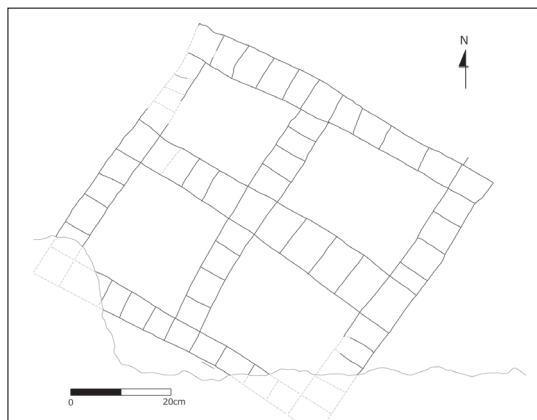


図5 発掘溝 300-B, C で確認された「パトリ」

るものの、わずかながらキミ期（紀元後150～250年頃）、マニック期（紀元後250～550年頃）の標識土器も含む〔Alvarado n.d.〕。少量とはいえ、マニック期の土器の多くは12層（地表下4.55m-4.70m）という深い地点からまとまって回収されているため混入とは考えられず、この巨大なサブ・プラットフォームの建設時期は、マニック期の初め頃と想定される。

地表下5m程度を掘り下げれば岩盤にあたると考えた筆者の事前の見通しが甘く、この発掘溝は、当初

五木田によれば、パトリの機能に関しては、単なるゲームであるという説から57マスのうち52マスを使ってゲームが行われたとし暦と関連させた占いも兼ねていたという説、球技と同じように豊穡儀礼も兼ねて遊ばれていたという説など様々な考えがあるようだが、五木田は各地の出土事例の分類・分析から、古代におけるパトリはより複雑で多様な用途を持っていたと考えている〔五木田2015b〕。今回の発見事例は、北のアクロポリス北東端の最下層プラットフォームのオープンスペースに刻まれていた。

この漆喰の床面の上層から出土した土器は、

大部分がマニック期（紀元後 250～550 年頃）の土器であった。漆喰の床面の下層からも、マニック期の標識土器が確認されたが、少量ではあるが、キミ期（紀元後 150～250 年頃）、カウアック期（紀元後 1～150 年頃）の土器も確認された [Alvarado n.d.]。しかし、パトリ自体がマニック期のもの



図6 発掘溝 300-D で出土した遺構

であるかどうかは不明である。刻まれたパトリは、浸食の度合いが少なく保存状態がよい。それに比べて、その東側の拡張トレンチ（発掘溝 300-G, H）で見つかった別のパトリの痕跡らしき刻線 [Nakamura, and Urizar n.d.] は、ほとんど確認できないほど保存状態が悪い。この点を考えると、今回発見されたパトリは古い時代のものではなく、古典期後期や終末期など後の時代に彫られた可能性は否定できない。

発掘溝 300-D では、地表下 1.7m の地点でやや丸みを帯びた直方体に加工された長さ 50 センチ程度の 6 つの石灰岩ブロックが見つかった。注目すべきはその形態で、ちょうどティカルの初期の建造物によく見られる、直角ではなく丸められたコーナー部に似ている（図 6）。一段目ブロックの下にモルタル状の詰め土もたいへん堅固に作られていた。遺構の性格は現時点では不明であるが、初期の最下層サブ・プラットフォームや埋蔵建造物の円形コーナー部である可能性は残されている。残念ながら、調査期間との関係で発掘区域が狭く十分な拡張は 2016 年度以降の調査課題となった。

年間 20 万人程度の観光客が訪れる上に、世界遺産でもあるティカル中核部の発掘調査の難しい点は、学術調査を日常の観光活動と調和させながら行わなくてはならないという点である。つまり、ティカル観光の目玉である北のアクロポリスにおける観光客の観覧ルートのすぐ横に、翌年度の調査まで調査溝を開けたまま残しておくわけにはいかず、危険のない完全な形で埋め戻しが求められた（写真 3）。世界複合遺産であるティカルの場合、それに加えて、周辺自然環境の原状復帰も求められる。発掘前と発掘後の景観が同じであるようにする必要がある。我々の調査の場合、調査後は、報告書が出版されなければ、見た目はそこで調査が行われたことがわからないような程度まで原状復帰を行った。

同様な状況は、発見されたパトリにもいえる。当初、何とか原位置での保存と展示の両立を模索したが、現状では持続的な保存の保証が得られないことから、しっかりした保存処置のあと埋め戻すことにした。

このように、2015 年度の発掘調査は、PTP が手をつけていなかった北のアクロポリス北東部を対象とした。北東部におけるプラットフォーム



写真3 北のアクロポリスのプラットフォーム
歩いているのは観光客のグループ（一番下のプラットフォーム北東コーナーから撮影）

ムの地表面からの形状は、一段目のプラットフォームの上に二段目のプラットフォームが載り、その上に三段目のプラットフォームが載っているというように、階段状ピラミッドのような形をしている（図4と写真3参照）。しかしながら、我々の調査によれば、これまで述べてきたように、少なくとも北東部における発掘部分では、二段目のプラットフォームの下にサブ・プラットフォームがあり、それは一段目のプラットフォームよりも古い時期に建設されたことを示唆している。つまり北のアクロポリスでは、最初に二段目のプラットフォームの下に埋まっているサブ・プラットフォームが建造され、その上に、後の時代に三段目のプラットフォームに覆われてしまう初期の建造物群が建設されていったということになる。この点は、PTPの報告結果を追認できる [Loten 2001:235-244]。やがて、北のアクロポリス建築複合は、現在みられるような二段目および三段目のプラットフォームの拡大を伴う形で発展していくが、その過程の一時期に全体が外側に拡張された形で一段目のプラットフォームが作られたと思われる。発掘溝 300-D で確認された遺構と発掘溝 300-A で確認されたサブ・プラットフォームの関係も含め、2016 年度以降、発掘調査区域を拡大させてこれらのプラットフォーム間の関係を増改築プロセスとともに確認する予定である。

5. その他の活動と今後の展望

2015 年度の発掘調査と関連したその他の活動としては、同時にティカルで行っている JICA 委託事業（草の根技術協力事業）との連携があげられる [中村 2015:83-84]。両事業を連携させて、定期的に発掘補助員たちに、発掘の目的や出土が予想される遺構、遺物を事前に教える研修を行ったり（写真4）、発掘調査から出土した考古遺物の清掃、注記、初期分類、修復の仕方を周辺村落の女性たちに教える研修を行ったりしたのである。ペテン地方では、マヤ遺跡がたくさんあり、毎年、複数の外国調査団による考古学プロジェクトが実施されている。そういったプロジェクトでは、発掘調査の意義や目的を理解したうえで仕事に臨める調査補助員や、発掘遺物の取り扱いができる地元の人材が求められており、技能研修を受けてその技術を身につけたティカル近隣集落の人々に雇用機会が増えることが予想されるからである。さらに、当該事業の活動の一つである地元の小中学校の児童・生徒のティカル遺跡訪問学習に、発掘現場の公開とその見学を加えた（写真5）。

前述した北のアクロポリスの学術調査目的と 2015 年度の発掘調査結果との関連であるが、「初期マヤ文明の形成過程におけるティカルの役割の再検討」を行うためには、10m を超すようなより深い発掘を行い、チュエン期（紀元前 350～紀元後 1 年）からカウアック期（紀元後 1～150 年頃）の土器を供伴する建造物や遺構を確認する必要がある。そのためには 2015 年度の発掘溝の初期面積が小さすぎたことがわかったので、観光ルート



写真4 発掘補助員への研修風景

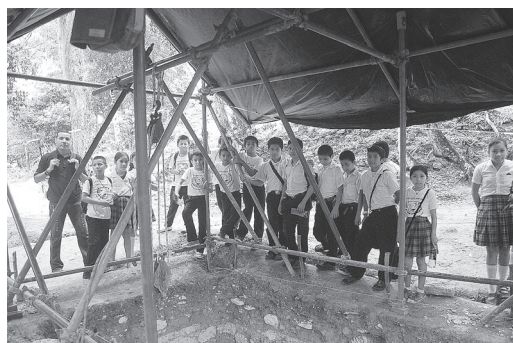


写真5 小中学生の訪問学習風景

の一部閉鎖につながり難しい面もあるが、2016 年度にはティカル国立公園の協力を得て最初からかなり広範な発掘面積を確保して臨みたい。発掘溝 300-A で確認されたサブ・プラットフォームは、ティカル王朝初期の時代にかかなりの労働力を投入して、おそらく一気に造られていると推定される。初期の支配者の権力の大きさを示唆する遺構である。PTP の復元に現れるプラットフォームとこのサブ・プラットフォームの関係について明らかにするために、2016 年度以降には、一段目（最下層）のプラットフォームから三段目のプラットフォームにかけて長い発掘溝を設置して発掘調査を行うことを計画したい。

また、「378 年事件の再検討」や「ティカルとカラクムルの抗争に関する再検討」を行うためには、5D-22, 5D-33, 5D-35 といった PTP が露出させただけで実質的に手つかずの、北のアクロポリスの建造物群そのものを発掘することが必要不可欠である。なぜならば、マヤ考古学では重要な遺構は通常、建造物と直接関連しているからである。なかでも建造物 5D-35 は、PTP がそれを覆う表土にもほとんど手を付けなかった建造物であることから、仮説の検証に大きな貢献が期待される。これら建造物の発掘調査には、発掘終了後の修復保存の資金的裏付けが同時に必要であるが、幸い、ユネスコ日本信託基金の投入が決まったので、2016 年度より挑戦していきたいと考えている^(註7)。

註

- (註1) 本稿で使う「神殿」という用語は、建物の形態から機能を推測してマヤ研究で使われている一般的な呼称であり、南米でアンデス文明調査団が使用している意味とは異なる。マヤ文明における建築については中村 2004 を参照のこと。
- (註2) ペンシルバニア・ティカル・プロジェクト (PTP) の功罪のうち「罪」の部分のいくつかを挙げる。例えば、現在ティカルを訪れる観光客のほとんどは、その中核部で歴史上存在しなかった景観を見ていることに気づいていない。ティカル観光の最大の目玉の一つであるグレートブラザを東・西・南の三方で囲む 1 号神殿、2 号神殿、中央アクロポリスが 8～9 世紀の景観であるのに対して、グレートブラザ北側の「北のアクロポリス」では、同時代の建造物 5D-33 1st が存在せず、そこに露出され修復されているのは 4～5 世紀の建造物 5D-33 2nd, 3rd なのである。これは、PTP がピラミッド神殿の内部を発掘するために「壊してしまった」からである。当時は、石造建造物の修復に関する国際的な指針を定めたベニス憲章も制定されていなかった時期であったとはいえ、歴史上存在しなかった景観を遺跡内に作り上げてしまった「罪」は大きく、グアテマラ国内では PTP の大きな問題点の一つとして今でも批判的に言い伝えられている。また、PTP 初代ディレクターであったシュックが友人に託したインタビュー原稿にもこの問題点が書かれており、彼は自分がディレクターを続けていたら建造物 5D-33 1st を修復していただろうと述べている (Shook 1998:150-151)。金沢大学は凸版印刷と協働で、この「負の遺産」をバーチャル・リアリティ (VR) 技術を使って解決しようと試みている。さらに、あれだけのプロジェクトであったにもかかわらず、正式な報告書が完全な形で出版されずに当時の調査員の死去によって幕引きとなろうとしていることも PTP の大きな問題点として指摘されている。
- (註3) この報告書は、グアテマラ人類学歴史学研究所の「モニュメント」部で閲覧できるが、2016 年度中に金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センターより出版される予定である。
- (註4) 現地での発掘調査は、グアテマラ人考古学者アルバロ・ハコボ Alvaro Jacobo と 6 人の調査補助員が主体となって 2015 年 5 月～8 月まで 4 ヶ月間行われた。プロジェクト共同ディレクターであるグア

テマラ人考古学者アレクサンダー・ウリサル Alexander Urizar がほぼ毎日監督し、筆者は期間中に2回グアテマラへ渡って現地で直接、監督するとともに、学務で日本滞在中はインターネット上でのやりとりで作業を指示した。出土土器は、グアテマラ人考古学者シルビア・アルバラード Silvia Alvarado が分析した。

- (註5) 床面上に残存していた「パトリ」は、この時点ではパトリであることを判別することがたいへん難しかったため、この掘り下げで「パトリ」南側の一部を作業員が誤って破壊してしまったと考えている。
- (註6) これまで我が国でパトリについての先行研究はなかったが、偶然、金沢大学の大学院生の一人（五木田まきは）がその前年（2014）に修士論文のテーマとしてパトリに興味をもち、執筆のためにティカルやその周辺遺跡であるナクム、ワシヤクトゥン等を踏査してマヤ各地の事例についてまとめていた（Gokita 2015a）。大学調査団の共同ディレクターは、筆者とともにその踏査に同行しており、本文中でもふれた定期研修の中でも現場の発掘補助員へパトリに関する知識供与をしていたため、このあまりポピュラーではない刻線画に対する大学調査団内の意識が高められ今回の発見につながったといえる。というのも、部屋の中のベンチや床面に刻まれたパトリであれば、発掘調査員もこういった場所では常に注意深く発掘を進めるので確認がされやすいが、今回のように野外の漆喰の床面上というようなオープンエリアに刻まれたものは、土が床面にこびりついたり浸食されていたりしており、刻線を確認するのは至難の業だからである。事実、マヤ地域におけるこれまでの発見例もそのほとんどすべてが室内での確認である（五木田 2015b）。
- (註7) 2015年度の北のアクロポリスにおける発掘調査は、科研費（JSPS KAKENHI Grant Number 26300026）、金沢大学超然プロジェクト資金、金沢大学基盤研究費で行われた。ご支援をいただいた大学の関係者に感謝するとともに、プロジェクトの監督を務めご支援いただいたグアテマラ人類学歴史学研究所モニュメント部やティカル国立公園技術部門スタッフに感謝したい。

参考文献

AECI (Agencia Española de Cooperación Internacional)

2013 *Veinte años de la AECI en Tikal*. Cooperación Española, Guatemala.

Alvarado N., S.

n.d. Análisis Cerámico. In *Proyecto Acrópolis Norte de Tikal, Universidad de Kanazawa, Informe Temporada 2015*. Informe presentado a IDAEH, 2016. Ciudad de Guatemala, Guatemala.

Carr, R. E. and J. E. Hazard

1961 *Map of the Ruins of Tikal, El Petén, Guatemala*. Tikal Report No.11. The University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Carrasco, R. and M. Cordeiro

2014 El origen de la montaña. In *Arqueología Mexicana* No.128, pp.41-45. Editorial Raíces, S.A. de C.V., Ciudad de México, D. F., México.

Coe, W. R.

1967(1988) *Tikal : A handbook of the ancient Maya ruins*. The University Museum, University of Pennsylvania,

Philadelphia.

- 1990 Excavations in the Great Plaza, North Terrace and North Acropolis of Tikal. *Tikal Report* No.14. Vol. 1-Vol. VI. The University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Delvendahl, Kai.

- 2008 *Calakmul in Sight: History and Archaeology of an Ancient Maya City*. Unas letras industria editorial. Mérida, Yucatán, México.

Gokita, Makiha (五木田まきは)

- 2015a *Patolli in the Maya civilization and its utilization as a cultural resource*. 金沢大学大学院提出修士論文。金沢大学大学院人間社会環境研究科。
- 2015b 「マヤ地域における『パトリ』の文化資源化」古代アメリカ学会第4回西日本部会研究懇談会発表原稿。

Harrison, P. D.

- 1999 *The Lords of Tikal: Rulers of an Ancient Maya City*. Thames and Hudson. New York.

IDAEH (Instituto de Antropología e Historia de Guatemala)

- 1983 *Reporte de las investigaciones arqueológicas en el grupo 5E-II*. IDAEH, Parque Nacional Tikal, Guatemala.

石田英一郎

- 1967 『マヤ文明：世界史に残る謎』中公新書127。

Laporte, J. P.

- 2001 Thirty Years Later: Some Results of Recent Investigations. In *Tikal: Dynasties, Foreigners, and Affairs of State*, edited by J. A. Sabloff, pp.281-318. School of American Research Press, Santa Fe.

Loten, H. S.

- 2001 The North Acropolis: Monumentality, Function, and Architectural Development. In *Tikal: Dynasties, Foreigners, and Affairs of State*, edited by J. A. Sabloff, pp.227-252. School of American Research Press, Santa Fe.

Martin, S., and N. Grube (マーチン、サイモン / ニコライ・グルーベ)

- 2003 *Chronicle of the Maya Kings and Queens, First Edition*. Thames and Hudson. New York. (『古代マヤ王歴代誌』長谷川悦夫 / 徳江佐和子 / 野口雅樹訳、中村誠一監修、創元社)
- 2008 *Chronicle of the Maya Kings and Queens, Second Edition*. Thames and Hudson. New York.

Maudslay, A. P.

- 1889-1902 (1974) *Biología Centrali-Americana or Contributions to the Knowledge of the Fauna y Flora of Mexico and Central America—Archaeology—Facsimile Edition*. Milpatron Publishing Corp. New York.

Muñoz C., Gaspar, and Oscar Quintana S.

- 1996 Intervenciones de restauración en el Templo I de Tikal, 1992-1994. In *LX Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala (1995)*, pp.335-342. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Ciudad de Guatemala.

中村誠一

- 1999 『マヤ文明はなぜ滅んだか? : よみがえる古代都市興亡の歴史』ニュートンプレス。
- 2003 「よみがえる王たちの物語：古代マヤの扉をひらく」『芸術新潮』2003年3月号、pp.5-84。
- 2004 「ジャングルのなかの神殿ピラミッド：古代マヤ建築」、八杉佳徳編『マヤ学を学ぶ人のために』、pp.69-96。

- 世界思想社。
- 2007 『マヤ文明を掘る：コパン王国の物語』（NHK ブックス 1086）日本放送出版協会。
- 2010 「マヤ文明世界遺産の調査と保存：ティカル遺跡の調査と保存に関する覚書（1）」『サイバー大学紀要』2: 53-62.
- 2013 「ティカル北のアクロポリスプロジェクト」『金沢大学文化資源学研究 第 13 号 ティカル北のアクロポリスプロジェクト報告（1）』、pp.1-6。
- 2015 「金沢大学によるティカルプロジェクト（2012～2015）概要報告」『古代アメリカ』18:79-94.
- Nakamura, Seiichi, and Alexander Urizar
n.d. *Proyecto Acrópolis Norte de Tikal, Universidad de Kanazawa, Informe Temporada 2015*.
Informe presentado a IDAEH, 2016. Ciudad de Guatemala, Guatemala.
- Nakamura, Seiichi., A. Urizar, and A. Jacobo
2015 Últimos hallazgos en la Acrópolis Norte de Tikal, Guatemala. Paper presented in the VI Congreso Centroamericano de Arqueología en El Salvador, Museo Nacional de Antropología, El Salvador.
- Sharer, R., and L. Traxler
2005 *The Ancient Maya, 6th edition*. Stanford University Press. Stanford.
- Shook, E.M.
1998 *Incidents in the Life of a Maya Archaeologist*. Southwestern Academy Press and Asociación de Amigos del País y Fundación para la Cultura y el Desarrollo, Guatemala.
- Stuart, D.
2000 The Arrival of Strangers. In *Mesoamerica's Classic Heritage: From Teotihuacan to the Aztecs*, edited by D. Carrasco, L. Jones, and S. Sessions, pp.465-513. University Press of Colorado. Boulder, Colorado.
- 塚本憲一郎
2016 「古典期マヤの都市国家におけるイデオロギーのせめぎあい」『考古学研究』62(4):71-90.
- Valdés, J. A., F. Fahsen, and G. Muñoz
1997 *Estela 40 de Tikal: Hallazgo y Lectura*. Instituto de Antropología e Historia de Guatemala (IDAEH) y Agencia Española de Cooperación Internacional (AECI), Guatemala.
- Wright, L.E.
2012 Immigration to Tikal, Guatemala: Evidence from stable strontium and oxygen isotopes. *Journal of Anthropological Archaeology* 31:334-352.

原稿受領日 2016年5月20日

原稿採択決定日 2016年9月13日